

## 豆炭行火と湯たんぽ

まめたんあんか

資料提供・文原美千代



豆炭行火容器と袋

日本の平均気温はここ100年で、約1度上昇しています。特に1990年代以降は熱帯夜や猛暑日が増え、冬日が少なくなっています。  
「昔はもつと寒かった」が感覚ではなく、気候変化という現実を示しているのです。これは地球温暖化によるもので、このままいけば100年後は今より3℃高くなるとの予測も出ています。暖かくなれば

いいという事ではなく、地球の気候バランスが崩れると、大雨などの自然災害が増えるという事です。温暖化の原因といわれる温室効果ガスの抑制を、一人一人が真剣に考えていかなければならないのです。

現代のように、暖房が行き届いた部屋にいては想像も出来ないくらい、昔の家は寒かったという人は多いはずで、暖をとるのは専ら火鉢や炬燵でした。

炬燵の始まりは、炭を用いた室町時代に遡りますが、明治に入ると練炭が、大正9年には豆炭が発明され広く普及しました。赤外線を熱源とした電気ごたつは戦後に開発され「ホームごたつ」として爆発的に売れ、どの家庭にも必ず一台ありました。「こたつでみかん」は冬の団らん風景の定番となりました。丹前(どてら)を着て炬燵に入り勉強した冬の日の思い出が、懐かしく甦ってきます。

「豆炭1個で24時間保温」のキャッチフレーズで売り出された品川燃料(株)の豆炭行火は注文が殺到し、初年度だけで47万个、最盛期は年間300万个以上売れた

といえます。昭和36年当時の値段は480円で、豆炭は1個1円でした。

豆炭行火と同じように、湯たんぽも、寝床に入れて使いました。プリキ製で布袋に入れて、更にタオルで包まないと火傷をしました。

近年はゴム製の湯たんぽも開発され、エコで環境にやさしく、災害時にも使えるとして見直されています。

### 【語句説明】

「熱帯夜」夜間の最低気温が25℃以上の夜  
「猛暑日」一日の最高気温が35℃以上の日  
「冬日」一日の最低気温が0℃未満の日



耐火性のある岩綿(昔は石綿)のくぼみに着火した豆炭を入れて使用



湯たんぽ

協力 郷土史の会